

[特集：近代西洋人キリスト教宣教師の中国語学習と漢訳]

16世紀西洋人宣教師の中国語学習教材にみる 中国人の口語文

The Spoken Discourse in Chinese Language Learning Materials
for 16th Century Western Missionaries

奥村佳代子

OKUMURA Kayoko

関西大学外国語学部

Faculty of Foreign Language Studies, Kansai university

E-mail: aocun@kansai-u.ac.jp

Abstract:

Michele Ruggieri, the Jesuit missionary who dedicated himself to evangelization upon arriving in China, immersed himself intensively in learning Chinese and received guidance in Mandarin from local Chinese teachers. One of the documents reflects Ruggieri's Chinese language learning in the *Tongsu Gushi*, which includes stories derived from the *Riji Gushi*, a popular educational material for childhood education during the Ming Dynasty. However, the language used in both are entirely different.

For the Chinese of that time, stories from *Riji Gushi* were not meant to be read but rather orally; they were meant to be heard and spoken. In other words, the starting point was not as written language but as a spoken and narrated experience. Ruggieri's Chinese teacher likely had a similar experience, and this is reflected in the language of *Tongsu Gushi*. While missionary Chinese language materials often tend to emphasize the perspective of the missionaries. However, from the standpoint of the Chinese, it was also an act of transcribing the spoken words of Chinese intellectuals skilled in classical Chinese into written form.

I. はじめに

ARSI (イエズス会文書館、Archivum Romanum Societatis Iesu) に所蔵される写本資料「千字文」「通俗故事」「詩韻」「尺牘指南」は、先行研究によってイエズス会宣教師の中国

語の学習に用いられたものであること、またイエズス会宣教師ミケーレ・ルッジェーリ（1543-1607）との関連が指摘されてきたが、陳恩維・徐茹鈺2023によって、これら4種類全ての資料に対してより詳細な調査がなされ、ルッジェーリ自身の書簡や書籍等を論拠に、中国本土に初めて足を踏み入れた宣教師ルッジェーリが使用した中国語教材であることが論証された。また、これらの資料が中国語学習にどのように用いられたのかを次のように具体的に示した。

这四种手稿，清楚地呈现了罗明坚作为第一位入华耶稣会士，是如何学习中文的：第一阶段为入门阶段，他在中文教师的指导下，通过跟读《通俗故事》培养语感、练习口语，利用对《千字文》的注音和解释，集中正音识字，掌握中文常用字；第二阶段为积累阶段，通过抄写《诗韵》等中国韵书，利用韵部和词根聚合快速扩大书面词汇量，并掌握中文的押韵常识；第三阶段为提高阶段，通过《尺牍指南》学习书信体写作，进行模仿写作，并积累了众多的诗词韵语和文化常识。

このように、それぞれの資料が重点的にどのような役割を担っていたのかを示したうえで、ルッジェーリは実際にはすべての資料に対して同様に書写、注音、翻訳、注釈、模倣等様々な手段で、聴く、話す、読む、書く、の訓練を総合的に行ったはずである、と指摘している¹⁾。

陳・徐2023が明らかにしたように、4資料はイエズス会宣教師の中国語学習史の礎を示す貴重な資料である。本論では陳・徐2023に着想を得て、特に「通俗故事」を取り上げ、ルッジェーリの官話学習をめぐる状況を、これが16世紀の中国人によって書かれた中国語文であるという点に注目してみていきたい。

II. ルッジェーリの中国滞在歴と中国語学習について

イエズス会宣教師であったミケーレ・ルッジェーリ（1543-1607）は、中国での布教のため1579年にマカオに到着し、官話の学習を始めた。1583年9月からは広東省肇慶に住み、いっそう官話の学習に励みつつ、キリスト教布教に尽力し、1588年にローマに戻った。ここではまず『中国キリスト教布教史』の記述にそって、ルッジェーリの中国語学習をめぐる状況を概観したい²⁾。以下に挙げる頭に番号（1）～（16）を付した記述は、『中国キリスト教布教史1』からの引用であり、〈 〉内の頁数は『中国キリスト教布教史1』の頁数である。

1) 徐茹鈺・陳恩維2022〈羅明堅漢語學習手稿研究〉《國際漢語教育史研究》第6輯50-66頁。

2) マテオ・リッチ、アルヴァロ・セメード著、川名公平訳、矢沢利彦訳注『中国キリスト教布教史1』（岩波書店、1982年）を参照、使用する。

中国での布教には中国語の習得が不可欠であるとの考えから、ルッジェーリが適任者として派遣されることになる。

(1) イエズス会宣教師が中国語の学習に取り組むのは、確固たる信念に基づいていた。

このように聡明で学問に熱心な人びとならば、生き方も立派で、彼らの言葉や文字のわかる神父たちが何人か王国に入国しても、それを拒むことはあるまいし、ついにはわたしたちの聖なる教えを受け入れるようになるだろうと確信するに至った。〈146頁〉

(2) 管区長はこの事業のためにミケーレ・ルッジェーリ神父を選んだ。1578年にローマからインディアに渡った神父は、すでに漁夫海岸（スリランカの対岸をさす）のキリスト教界で働いていた。翌1579年7月、ルッジェーリ神父はマッカオに到着した。〈147頁〉

(3) わたしたちの住院に到着すると、ミケーレ・ルッジェーリ神父は、ヴァリニャー〔ノ〕神父の残した命令に従って、チーナ文字と、マンダリーナ〔官話〕といってチーナ語のなかではいちばん共通性の高い言語の習得にとりかかったが、それはたいへん骨の折れることだった。なぜならば、内地からきたチーナ人はあまり学問がない人びとだったから、それほどたくさん文字を知っているはずもなく、またキリスト教徒になって剃髪をしたり、わたしたちと同じ服装をした数名のチーナ人は、ポルトガロ商人の通訳を務めることはできても、まったくチーナ文字を知らなかったし…… 〈150頁〉

(4)……大きな障害がふたつあった。ひとつはマッカオの神父たちの数が少ないのに、ポルトガロ人の仕事が多かったことだ。そのため、ルッジェーリ神父がそれにかかずらわっていれば、必然的に、チーナ研究という彼自身の仕事は損失が大きくなった。〈153頁〉

(5) 神父は、通訳をつうじて、あの地に居住することについて話し、すでにチーナの文字や言語を勉強していることを話した。〈156頁〉

(6) チーナ担当のふたりの神父はいずれもチーナ語を話せなかったし、ルッジェーリ神父にしてもさほどチーナの文字を知っていたわけではないので、このような重要な交渉には不十分だったからだ。(157～158頁)

(3)～(6) が示すように、マカオ到着後、ルッジェーリはただちに官話の学習にとりかかるが、容易なことではなかったことがうかがわれる。勉強の成果は出ていたと考えられるが、まだ文字に対する知識は不十分な面もあり、中国人との交渉には通訳の力が不可欠であった。

彼らが目標としていた広東省への移動は容易ではなく、何度かの挫折を経て、彼らの言葉を借りると、「どうしてこういうことになったのか」突然の僥倖で、肇慶での居住と教

会の建設が許可され〈165頁〉、1583年9月10日に肇慶に到着した。

肇慶ではさらに官話学習に力を入れることができたようである。

(7) そして来客を迎えるほかは、残った時間を言語や文字や礼儀作法の習得に当て……

〈176頁〉

(8) あるときは通訳を通じて、あるときはチーナ語を習っている神父たち自身の口から、キリスト教国の立派な習慣や、偶像教の誤りや、神の教えが自然の光にもかない、また書物のなかでこの国の昔の賢人たちが教えていることにもかなうものである、と神父たちが言うのを耳にしたからだ。〈178頁〉

(9) 彼（筆者注：フランチェスコ・カブラーレ神父）はみずから教会では初めての二名の信者たちに洗礼を授けた。ひとはフォキエーノ〔福建〕省出身のシューツァイ〔秀才〕だった。彼は家に住みこんで神父たちにチーナ文字を教えていた文人であり、パーオロと命名された。もうひとは先に述べたチンニコだった。彼は友情を保つために神父たちの祭壇を預かってくれた人であり、ジョヴァンニと名付けられた。

(8) にあるように、中国人に中国語で話して聞かせることも可能となり、中国語の上達には、(9) に登場する秀才を先生として招き、直接教わったことによると考えられる。

滞在時間の経過とともに、神父たちの中国語による布教は進展を見せた。

(10) 神父たちの入国が成功を取め、深い信頼を集めているという報せを聞き、言葉と書物をつうじて聖福音が広まり始めたという報せを受けると……³⁾〈200頁〉

(11) 一方、神父たちは家にすぐれた文人を置いてチーナ文字を習っていたので、文人たちから深く使用されるようになった。〈208頁〉

言葉や文字の学習の継続は、中国人の信頼を得ることにも一役かっていたことがわかる。

また、滞在先の家に通訳をおき、旅にも同行していた。

(12) 通訳ひとりとはかに手伝いのチーナ人ふたりだけをつれて、彼（筆者注：ルツジェーリ神父）がひとりで行くことになった。〈210頁〉

ドゥアルテ神父よりもルツジェーリ神父とならうまくゆくと考えていた家の通訳や使用人…… 〈221頁〉

上記からは、周囲の人々に対するルツジェーリ神父への信頼ぶりをうかがうことができるだろう。

ことばの学習がすすみ、中国の書物を通じて学んだ成果を想起させる記述も見られる。

(13) 神父たちが日頃からチーナの学問にすぐれた文人を家に置いて昼も夜も実に熱心に勉強をつづけ、その学問を研究し、そのために多くの本を買い入れ、書齋が本に埋

3) ゴアのヴァリニャーノ神父への報せ。

もれているのを、彼らは見ていた。〈180頁〉

(14) 文人たちは、わたしたちの教えについて印刷した「十戒」に書いてある以上のことを強く知りたがったので、神父たちは家にいた文人とともに『公教要理』をこの国の言葉に改めた。〈180頁〉

(15) そこで知事はみずから、すでに多少はチーナ文字を知っていたマッテオ神父に命じて、そこに記されている注釈も全て含めてその地図を翻訳させた。〈190頁〉
後からきたマテオ・リッチはすでに漢字をよく理解していたことがうかがわれる。

1588年に、ルツジェーリはローマに戻る事となる。その頃、肇慶では神父たちの権威をより高めるために、皇帝に許可を高める手紙を書くことになった。

(16)……ヴァリニャーノ神父は、マッテオ神父とシャオキーノのすぐれた文人の手をかりて、教皇がチーナ国王およびクアントーネのヴィチェレーに宛てる手紙と、神父たちに与える許可書をチーナ文字で書かせた。それは、彼らが読めるように、完全にチーナの様式にそったものにした。それをローマに送り、美しく、多彩な装飾を施して書きあげ、返送してもらうことにした。ルツジェーリ神父はすでに年老いてチーナ語を覚えられなくなっていたので、これを機会に彼をエウローパへ派遣することになった。彼は長年にわたってこの地域にいたので、この事業を推進するために教皇や総会長や他の人びとへの手紙に記された事柄のほかにも、実際に見てきた証人としてさまざまな事柄を正しく伝えられるからだ。〈226頁〉

上記のように、当時としてはすでに高齢となっていたルツジェーリは、教皇への手紙を託され、1588年11月下旬にマカオを出発し、中国の地を後にした⁴⁾。

『中国キリスト教布教史1』によると、ルツジェーリは1579年7月からマカオで官話を学び始め、1583年9月から1588年まで肇慶で宣教しながら中国語の勉強を継続していたと考えられる。1588年11月にマカオを離れヨーロッパに戻ってからの学習歴について詳細に述べた先行研究は管見のかぎり見当たらないようであり、(16)の記述にあるようにルツジェーリは高齢のため中国語を覚えることがすでに困難になっていることを合わせて推察すると、ルツジェーリの中国語学習は中国滞在中に集中していたと考えられる。

III. 「日記故事」由来の故事とことばについて⁵⁾

ARSI所蔵「通俗故事」は、陳・徐2023によると、中国に滞在した10年間にルツジェー

4) 226-227頁の本文及注(1)による。その後、1589年9月13日にリスボンに到着し、ローマに移動した。ナポリ王国サレルノで亡くなったという。

5) 「日記故事」の版本は多く、単に「日記故事」と題された刊本はないため、本論では書名でないかぎり、「日記故事」と示すことにする。

りがどのように中国語を学んだのかを示す資料であり、中国語の語感を養い口語を練習するのに適していた。「通俗故事」の1頁目に署名されている「魯子秀」は、中国に渡ったイエズス会宣教師の名簿に確認することができないため、宣教師ではなく、宣教師に中国語を教えた中国人の名前であり、おそらくルッジェーリが中国滞在中に官話学習のための教師として数年にわたり家に置いていた秀才であろうと指摘されている⁶⁾。陳・徐2023は次のように述べる。

这些蒙学故事虽然是用文言写成，但讲述时却采用通俗口语。我们现在看到的以口语写成的通俗故事与千字文合订在一起，就是当时蒙学故事教学情况的反映。换言之，罗明坚在学习千字文后，其中文教师以口语向其讲述一些事关忠孝廉节的故事。(56-57頁)

ここで指摘されているように、ARSI所蔵「千字文」「通俗故事」「詩韻」「尺牘指南」は、ルッジェーリの中国語学習の有り様を示している。特に「通俗故事」に関しては、ルッジェーリが口語を学びながら中国人の道徳や倫理、宗教観を理解することができるように工夫されていた⁷⁾。また、「千字文」で文字と発音を学び、「通俗故事」によって忠孝廉節を学ぶ手法は、明代の童蒙教育を反映するものであり、外国人宣教師にとっても実用性に富む学習法であったことがうかがわれる。

「通俗故事」に収められた話は由来する文献や話が特定されている⁸⁾。陳・徐2023では、西洋に由来する故事が中国語訳されていることが、とりわけ注目に値すると指摘し詳細に論じているが、「日記故事」に由来する故事の語彙については、まだ本論で触れることのできる余地がありそうである⁹⁾。

橋本2006によると、『日記故事』は版本が多く、またそれぞれ篇数も異なり、編者によって自由に収録する故事の取舍選択がおこなわれたと考えられる¹⁰⁾。橋本2006による詳しい版本調査によると、現存する「日記故事」の刊本は、ほとんどが嘉靖年間以降のものであり、巻首に「二十四孝」を持つ「日記故事」の出現はさらに遅く万曆以降と考えられ

6) 陳・徐2023の指摘による(56頁)。AESIに所蔵される「千字文」と「通俗故事」への調査と分析から、長年調査と考察が重ねられてきたルッジェーリの中国人中国語教師の人物像に、具体的な名前を与えられた。ただ、陳・徐2023はこの秀才を“罗明坚在澳门时聘请的福建秀才”と推測しているが、『中国キリスト教布教史』では、家に秀才を置いて勉強したと明記されているのは、広東省に移ってからのことである。

7) 陳・徐2023による(57頁)。

8) 陳・徐2023によれば、たとえば「忠孝廉節」を説くものとして第4、8、9、14、22篇、は『日記故事』に、第21、23、25、26、32篇は『二十四孝』に由来するという。なお、陳・徐2023は、全35話とするが、筆者の数え方では34話であり、本論では暫定的に34話とする。

9) 陳・徐2023 57-59頁。

10) 橋本草子「『日記故事』の現存刊本及びその出版の背景について」(『中国：社会と文化』21、108-124頁) 116頁。

る¹¹⁾。ルッジェーリは万暦の中頃に帰欧したが、建陽で「日記故事」が盛んに刊行されていた時期にマカオと肇慶におり、「魯子秀」から中国語を教わっていたので、いずれかの本をふたりが見ていた可能性はもちろんあり、「通俗故事」は「日記故事」の文字を参照しながら書かれた可能性もあるが、ここでは彼らが見た可能性のある「日記故事」を特定することはまずおき、初歩的な作業として、1542年（嘉靖2）に刊行された『新刊大字分類校正日記大全』の対応する故事を示し、両者の語彙の違いを確認することにする¹²⁾。

III-1, 「通俗故事」と由来する「日記故事」

「通俗故事」と、それに該当する「日記故事」の本文との対応関係を示すと次のようになる。それぞれ左欄に「通俗故事」を、右欄に「日記故事」を提示し、可能なかぎり、対応する箇所を並べて示すようにした。なお、「通俗故事」は、ARSIのウェブサイトに公開されている画像 (<https://archive.org/details/JS-I-58a/mode/1up>) を参照したが、特定が困難な文字については□で示した。また、「日記故事」引用中の【 】は、用いた版本で割注として記されている事柄であることを示す。

(1) 「通俗故事」第4篇と「日記故事」卷8 徳報類「救雀得環」

古時有個楊寶裁有十零歲 一日行路見隻黃雀着傷落地	後漢楊寶【弘農人】性慈愛年九歲 至華陰山北見一黃雀為【去声】鷗鳥【惡鳥】所搏【擊也】墜地
蚤蟻都來食他	又与螻蟻所困
楊寶見這黃雀就□拿回放在家裡	宝取懷之以歸置巾箱中
把東西與他食	飼以黃花【綵黃花以食之】
養得百多日這黃雀却好了楊寶放他飛去	百餘日毛羽既成朝去暮來積年之后忽与黃雀俱來哀鳴繞宝數日乃飛去
後幾日這黃雀變成一娃子穿黃衣	是夜有黃衣童
把玉環四個送與楊寶說	向宝再拜曰我是西王母使【去声】者往蓬萊過此感君仁愛拯救數年承恩養以白環四枚与宝曰
你子孫後來有大官做	令君子孫潔白位登三公【潔白无汚蝕之行三公台位也】當如此環矣

11) 橋本2006、116頁下段から117頁上段4行目による。橋本2006で巻首に「二十四孝」が付されているものとして挙げられている版本は、年代のわかっている最も古いものでも万暦39年（1611）であり、ルッジェーリが中国を去った後である。また、これらは福建省建陽の本屋から出版されたものが多いといい、ルッジェーリの滞在地であったマカオや肇慶との距離的な近さも、「日記故事」が比較的入手しやすかったことを示しているかもしれないが、後述するように、それだけが理由ではないと考えられる。

12) 橋本2006、109頁に詳しい。本版本は「二十四孝」を伴わない系統で、北京国家図書館蔵本であるが、本論は『中国古代版画叢刊』2（上海古籍出版社、1988年）所収の影印（575-752頁）を参照した。「日記故事」はその後、1566年、1593年にも刊行されているが、それぞれ違いがあるという（109-111頁）。また、『中国古代版画叢刊』2の「後記」には、1591年の版本について言及がある。

後面子孫果然做得大官	后宝生子震震生秉秉生賜賜生彪四世三公果應白環之數德業相繼
------------	------------------------------

(2) 「通俗故事」第 8 篇と「日記故事」卷 7 應物類「不發盜惡」

當初有個人名叫陳實第一好善的人	後漢陳寔【字仲弓潁川許人】在鄉閭平心率物有爭訟輒求判正【人有爭訟就仲弓求判正是非】曉譬曲直退無怨者【開曉喻言以從順□□□判正而退者皆得其情無有怨言】至乃嘆曰【甚至其人嘆息而言】寧為刑罰所加不為陳君所短【理曲者恐仲弓之見責也】
有一日有個竄賊進他房裡要偷他財物將身躲在樑上	時歲荒民儉有盜夜入其室止于梁上
陳實見了都不驚動他叫兒子孫子都出來說	寔陰見之乃呼子孫正色訓之曰
你們兒孫要做好事為善若不為善就與樑上君子一般	夫人不可不自勉不善之人未必本惡習以性成遂至於此【言人性本善初無為惡之心因氣習遂成其性以□於惡】樑上君子是矣【指樑上之人以君子稱之】
這賊聽見說這話就下來服罪	盜驚自投於地稽顙歸罪
陳實說我看你這個人也是好人緣何做這等的醜事	寔徐曰視君狀貌不似惡人宜深尅已反善【自改迂善】
賊說因為家道貧窮沒有衣食	富由貧困耳
陳實說你既貧窮我就把你一疋絹去賣些錢鈔來做買賣做個好人快不要做這樣事	令遺絹二匹【遺贈也】
賊感其恩叩頭謝罪去做好人	自是一縣無盜郡功曹遷除太丘長號文範先生

(3) 「通俗故事」第 9 篇と「日記故事」卷 1 生知類「取毬擊毬」

古有一人叫司馬公做娃子時節同娃子眾人戲耍在魚〔瓦岡〕裡照水有個娃子跌下甕裡眾娃子都驚走去	宋文彥博【字寬夫汾陽人】幼時與群兒擊毬毬入柱穴中不能取公【指求彥博】以水灌之毬浮出○
司馬光就拿石頭打破這甕水流出了娃子纔淹不死得出來後長成時晝夜	司馬光【字君實】幼與群兒戲一兒墮【落也】水甕中兒驚定不能救
買書不歇自家怕眼睏打盹討個□木做枕頭纔睡着那枕頭轉動就起身讀書後果至尚書之位	公【司馬光】取石破其甕兒得出【墮甕之兒得活其智可知】

(4) 「通俗故事」第 14 篇と「日記故事」卷 3 友悌類「感樹敦睦」

當初有三個兄叫做田真田廣田慶	晉田真弟慶廣【田慶田廣】欲分財產【兄弟各欲分業】
庭前有一根紫荊樹	堂前有紫荊一樹花華盛茂
他兄弟三人指着這樹說這樹不死我兄弟不分居有一日要分	夜議分為三【弟兄欲以此樹折為三分】
晚間這樹就死了三兄弟見這樹死兄弟就不肯分樹又回生	曉即枯死兄弟嘆曰樹本同根間分尚如此【猶人兄弟亦有其根】況人兄弟同氣之義而可離是人不如樹木也兄弟感樹之情不復分焉更加敦睦【和睦尤加也】
有第二的婦人又要分見樹不死早晚把熱水來潑那樹那樹又死了	紫荊復華開花盛【是人物相感天理昭然】

三兄弟就分後來第二的兄弟知道這個婦人把熱水淋他纔死就把妻小打罵這婦人就投河死了三兄弟抱着這根樹啼哭這樹又生起來三兄弟就不成分

(5) 「通俗故事」第22篇と「日記故事」卷2 孝思類「刻木為母」¹³⁾

<p>古時有個叫丁蘭自幼喪了父母 到長大時節思量父母的恩勞要盡奉養之禮 乃把木來刻成父母的形像朝夕奉祀待如生時一般</p> <p>偶有鄰舍人家來借物件定問過纔與他有個人叫做張叔食醉把枋杖來敲其木像 丁蘭回來見木像流泪知是張叔把他父母打就與張叔相打到官處問了張叔的罪</p> <p>丁蘭妻服事日久不敬他把針來刺木像手指就出血丁蘭回見木像流泪知道老婆這等【無理】就把老婆休了</p>	<p>漢丁蘭【梧口河內人】少喪【可昔去声】</p> <p>乃刻木為母日將飲食獻之</p> <p>至久其妻不敬用針刺其身忽血出口歸遂放其妻【逐去也】</p> <p>鄰有借物者木人大淚蘭即不與【不与鄰人之物】鄰人怒敲木人蘭往殺之告於官官免其罪【以其為母报怨故不加罪】</p>
---	---

(6) 「通俗故事」第25篇と「日記故事」卷1 愛親類「受杖悲泣」

<p>又有一人叫伯俞也是孝子 平常有過失母親把棍子來打他他再不啼哭到一日間又被母親打他大聲啼哭母親問他說我往常打你你都不啼哭今日打你你啼哭怎麼說 伯俞說平日母親打我我痛是母親氣力壯健今日打我不痛是母親年老氣力衰了我所以纔啼哭</p>	<p>漢韓伯愈【梁人】</p> <p>時有過母杖之大泣母曰往者【昔日也】杖汝常悅受之今日杖汝何以悲泣</p> <p>伯愈曰往者杖常痛知母康健今杖不痛知母力衰是以悲泣【其亦為人子者所當深思矣】</p>
--	---

(7) 「通俗故事」第24篇と「日記故事」卷1 愛親類「戲彩娛親」

<p>古時有個人叫做老萊子 年七十歲沒子性至孝順老萊子 見父母憂悶時節□□一□□□花衣服□水潑在廳上他即學學小娃子抱膝跳廳上地活假跌在地下象娃子模樣使父母歡笑</p>	<p>周老萊子至孝【□人】</p> <p>行年七十父母猶存着五綵爛衣【以雜色衣為之】為嬰兒戲於親側言不稱老【恐親以其老為憂】為【去声】親取食上堂足跌而屈因為嬰兒哭</p>
---	---

13) 「通俗故事」に「日記故事」のどの版本が近いかは、詳細な調査が必要だが、「刻木為母」について言えば、時代は降るが巻首に「二十四孝」が付いた和刻本『日記故事大全』（1833年刊）の「刻木事親」には隣人に関する記述がない。隣人に関する記述の有無という観点からは、「通俗故事」は相対的に和刻本（及びその原本）とは繋がりが弱く、本版本とは繋がりが強いと言えるだろう。

(8) 「通俗故事」第31篇と「日記故事」巻1 孝感類「剖水鯉出」

<p>古時有個行孝的人叫王祥……¹⁴⁾</p> <p>後又唆繼母假病要吃鯉魚那時冬天水凍叫他去討鯉魚必定凍死那王祥聞知繼母有病思食鯉魚就去討之那時河水水硬他脫去身上衣服睡在水上等熱氣水消則鯉魚可得天神見得王祥小心忽然水開一雙鯉魚跳在身邊</p> <p>他就起來那王覽探知尋到江邊就扶王祥回來大家歡喜天地鬼神共怒這虔婆即叫雷公霹靂打死這虔婆後來母子兄弟和氣朝廷聞知旌獎賜官封贈一門孝義</p>	<p>晋王祥【字休徵琅琊人】早喪【去声】母繼母朱氏不慈【有憎惡於王祥】祥愈恭謹【不以母不慈而損其孝也】父母疾衣不解帶湯藥必親嘗</p> <p>母欲生魚時天寒水凍祥解衣將剖水求之【剖破也】忽雙鯉躍出持之而歸</p> <p>母又思黃雀炙【昔只燔肉也】復有黃雀數十飛入其幕得以供母鄉里驚異以為孝感所致</p>
--	---

III-2, 「通俗故事」と「日記故事」のことばの違い

上に示したように、「通俗故事」と「日記故事」は用いられている言葉が異なり、内容も完全に同じというわけではない。また、「通俗故事」は「日記故事」のこの版本に基づいたものであるとする証拠はない。だが、「日記故事」は、通常共通して文言で書かれているため、文言が白話かという観点から両者を比較し、語彙の使用状況の違いをみることは可能であろう。「通俗故事」（通俗と表示）と「日記故事」（日記と表示）の大きな相違点を以下に述べる。

“拿回放在家裡”（通俗）に対応する箇所は、“取懷之歸置巾箱中”（日記）である。個々の語が異なっているだけでなく、「通俗」では“拿回”“放在”のように、動詞の後に補語が付いた語が用いられている。“把東西與他食”（通俗）、“把玉環四個送與楊寶說”（通俗）に対応するのはそれぞれ“飼以黃花”（日記）“以白環四枚与宝曰”（日記）である。「通俗」では介詞“把”が用いられているが、「日記」では“把”は用いられていない。“他叫兒子孫子都出來說”（通俗）“你這個人也是好人”（通俗）のように、副詞の“都”“也”が用いられているが、「日記」には用いられていない。“司馬光就拿石頭打破這甕”（通俗）では接尾辞の“頭”、接頭辞の“打”が用いられているが、“取石破其甕”（日記）のように接頭辞や接尾辞は用いられていない。“母親問他說我往常打你你都不啼哭”（通俗）“今日打你你啼哭怎麼說”（通俗）と“母曰往者杖汝常悅受之”（日記）“今日杖汝何以悲泣”（日記）は、“母親”と“母”、“問他說”と“曰”、“往常”と“往者”、“打”と“杖”、“你”と“汝”、“都”と“常”、“啼哭”と“悲泣”、“怎麼說”と“何以”のように、同じ事柄を述べてはいるが、使用されている語は異なる。

14) 「通俗故事」はこの後に、当該部分より4倍ほどの分量の「日記故事」には描かれていない部分が続いた後、当該部分の話が登場する。

両者の代名詞、副詞、介詞、助詞の語彙の使用状況を表1で見してみる。

表1、品詞別「通俗故事」と「日記故事」の使用語彙

	通俗故事	日記故事
人称代名詞	我 你 你們 他	汝 之
指示代名詞	這 這等 這樣 那 其	此 其
副詞	也 都 又 纔 乃 不 沒有	又 復 俱 乃 徐 不
介詞	把 將 與 同	与 向 為
構造助詞	的 之	之
語気助詞	了	矣 耳 也

表1に示した語彙の違いは、語り聞かせるための口語と読むための文言の違いであり、「通俗故事」は口語、つまり語って聞かせる言葉として書かれているといえるだろう。「日記故事」は非常に簡潔な文言で記されており、そのまま声に出して読んだとしても、耳で聴いて理解するには不向きであったのだろう¹⁵⁾。

陳・徐2023が指摘するように、「通俗故事」はルッジェーリが語感や口語を学ぶために用いた。では、「通俗故事」はどのようにして口語で書かれたのであろうか。

橋本2006によると、「日記故事」は、蒙学書として用いられ、明代に盛んに出版され、良知・良能を養うために、日々故事を覚え道理を理解することによって徳性を身に付けさせるための書物であった¹⁶⁾。身につけるべき徳目が説かれた故事は、読まれただけでなく、「日々覚えさせる」ため、庶民のための小学教育の機関の社学で用いられた¹⁷⁾。明代の黄佐の『泰泉郷禮』巻3の「郷校」に、社学での教育の様子が次のように述べられている。

習禮畢各就位溫習早學所讀書自後五日一次教以朱子小學及日記故事內古人嘉言善行一段如黃香扇枕陸續懷橘之類直白說之令其靜默諦聽抵暮擊雲板直日者徹先生書席如儀揖退諸生夜歸仍在燈下講誦當日所教即以所教之事¹⁸⁾

郷学では礼儀を習い、早学の復習をして、その後は5日に一度、教師は朱子小学および日記故事の古人の嘉言善行を口語（白説）で教え、静かに聴き入らせ、学生たちは帰宅後

15) 「日記故事」は、故事の内容と教訓が記され、余計なことばは記されていないといえることができる。「通俗故事」は、必ず“古時有個……”“當初有個……”“古有”“古時有……”ということばがあり、故事が始まることも、昔の忠孝廉節を語り聴かせるスタイルだと考えられる。

16) 橋本2006、108頁による。1566年刊行『新增図像小学日記故事大全』の歴耕勞農による「小学日記序」にひかれた楊億の言葉をひき、「日記故事」編纂の意味と名前の由来を説いている。

17) 橋本2006、117頁下段による。「日記故事」がどのように教育に用いられていたかについては、橋本2006から非常に多くの知識を得た。ここに挙げる、「日記故事」に関する引用は、すべて橋本2006で引用されているもので、そのうち筆者がその原文を確認できたものを、ここに引用したものであり、橋本2006の日本語訳文や説明を参考としている。

18) 『四書全庫珍本』第4集（台湾商務印書館、1973年）所収。

に当日の教わった内容の復習をする、という。「日記故事」の故事は、書物で読んで学ぶものではなく、口語で語り聴かされ、耳で学ぶものであった。

また、「日記故事」は社学で学ばれる教材として用いられただけでなく、上流階級の女性が家庭教育の場で読み、語り聴かせるものでもあった。明代の朱澗の『天馬山房遺稿』巻3「榮壽慶辭」に、黄道卿の母親の60歳の誕生日のお祝いの言葉として次のようにある。

黄氏之賢戸部之母裔出唐金紫澄塘知府新公之孫女水莊斯美之女幼能讀小學女孝經諸書
兼行不怠旣旣歸于封戸部主事 闕 公逮事舅姑克盡孝敬相夫婚嫁五弟妹四子女創屋置田
建祠築墓春秋蘋藻助奠孔時餘凡酒醴穀核賓客之需不問有無所呼輒具慈惠下淑均四子襟
裾不問可知其所出能言口授以小學日記故事女賓至必令朗誦講解¹⁹⁾

黄道卿の母親は幼少から聡明で書物をよく読んだ。4人の子どもたちを等しくよく育て上げ、よく『小学日記故事』を子どもたちに語り教え、女性の来客には必ず朗誦させ解説させたという。「日記故事」の故事は上流の女性によって家庭教育の中でもまた、語られるものでもあった。

橋本2006が指摘するように、「日記故事」は耳で聞いて理解することのできることで語り教えられていたと考えられる²⁰⁾。

「魯子秀」が中国滞在中のルツジェーリに官話を教授した中国人の秀才だとすれば、子ども時代から家庭内で、また社学で、口語で語られた故事を繰り返し聴き、暗唱できるほどになっていた可能性がある。

IV. まとめ

ルツジェーリは中国で集中的に中国語を学んだ。現地で中国語母語話者から直接学んだという学習環境を見るかぎり、また、『中国キリスト教布教史』にみられるルツジェーリに対する評価をみるかぎり、熱心に、謙虚に取り組んだ結果、高いレベルの中国語力を身につけることができたのだろう。「千字文」と「通俗故事」は、官話の習得を目指し、口語学習に力を入れた現地の学習ぶりをうかがわせるものである。

しかしまた、「通俗故事」は当時の中国における「日記故事」の流行と教育を反映する

19) 『四書全庫珍本』第4集（台湾商務印書館、1973年）所収。

20) 橋本2006は結論部分で、「嘉靖期以降、「日記故事」の諸本は、社学をはじめとする各種の「小学」での教科書として広い購買層をもっていたことが言えるだろう。ただ、教科書といっても一人一人の生徒が書物を購入できたとは考えにくい。教師が所持する一冊の「日記故事」をその挿し絵を示しつつ教師が語り聞かせたのであろう。」と述べ、「日記故事」の刊本の一つの注釈が白話で書かれていることもそのような事情を反映していると思われる、と指摘している。

ものでもあった。「魯子秀」は、その故事を「日記故事」を読むことによってではなく、むしろ語られたお話として身につけていた可能性がある。さらに憶測すれば、自ら子どもたちに教える立場であったかもしれない。

「日記故事」が童蒙教育のために広く語られてきたという環境を考慮すれば、「通俗故事」における「日記故事」に由来する故事を描写する中国語は、「魯子秀」の全く独自のものというわけではなく、教育を受けた中国人の共通のことばであった可能性があり、そうして語り聴かされてきたことばを、「魯子秀」は、文字として記述した可能性も考えられるだろう。そして、それは、外国人宣教師に官話学習の前進をもたらしただけでなく、自らの「語られることば」を客観的にとらえる営みでもあったのではないだろうか。

参考文献

〈中国語文献〉

論文

徐茹钰・陈恩维 2022 〈罗明坚汉语学习手稿研究〉《国际汉语教育史研究》第6輯50-66頁、北京：商務印書館。

資料

黄佐『泰泉鄉禮』『四庫全書珍本』4集所収 1973年 台北：台湾商務印書館。

建安草摠虞韶以成纂集 書林鰲峯後学熊大木高註『新刊大字分類校正日記大全』1542年、影印本『中国古代版画叢刊』2所収 1988年 上海：上海古籍出版社。

朱澗『天馬山房遺稿』『四庫全書珍本』4集所収 1973年 台北：台湾商務印書館。

「通俗故事」 Archivum Romanum Societatis Iesu 資料番号 Jap.Sin.I.58a ウェブサイト公開資料 (<https://archive.org/details/JS-I-58a/mode/1up>)。

〈日本語文献〉

川名公平訳、矢沢利彦訳注 1982年『中国キリスト教布教史1』（マテオ・リッチ、アルヴァロ・セメード著）東京：岩波書店。

橋本草子 2006年 「「日記故事」の現存刊本及びその出版の背景について」『中国：社会と文化』21号：108-124。